

栗野・徒然日記

五帖の参・夏

令和二年十一月から綴り始めた「栗野・徒然日記」を、**春(三〇五月)**、**夏(六〇八月)**、**秋(九〇十一月)**、**冬(十二〇二月)**の季節ごとに再編集しました。
栗野の四季折々と日常をつれづれなるままに。

それでは一筆!!

2025.6.1 路傍の花～その 11～ 「似た者同士⑨」



ハハコグサ(トップ写真)は、春の七草のごぎょう。草餅に、ヨモギではなく使われていたと言います(今でも再現している地域があるそう)。野草には、食べられる草が多いけれど、毒草があったり、先の日記にも綴ったように、ノビルにそっくりの園芸種アリウムが野生化したりしていて、注意が必要です。山菜ならぬ栗野の野草料理、摘み草料理を、一冊にまとめたいですね。

ハハコグサに対して、チチコグサがありますが、両種は、はっきり違いが分かります。

一方、チチコグサの仲間同士は、とても見分けが難しい。同じ場所に違った種類が混在しようものなら、混乱必至。ちなみにチチコグサも食べられるとのことだけれどハハコグサのように、用いられてこなかったと言います。見分けられない種類がいくつもあるなら、無理しない方が良いでしょう。

ちなみに、栗野の分布を見る限り、ウスベニチチコグサの数は少なく、ハハコグサも少ない、チチコグサもそれほど多くはない。一方、ウラジロチチコグサ、チチコグサモドキはかなり繁殖している模様。混在したり、同じエリアに生えている。となると、さらに交雑種が生まれてもおかしくないのかも。

畦道や公園、山際に多く見られ、堤防ではあまり見かけません。



▲チチコグサ



▲北アメリカ原産のウスベニチチコグサは、1930年代に採集され、チチコグサモドキよりも普通に見られるようになったと言いますが、栗野では山際にひっそりと咲いていた。



▲南アメリカ原産で、昭和 40 年代から分布が広がったとされるウラジロチチコグサは、葉裏が白いのと、開花期に根元に輪状に葉が残っているのが判別しやすい。と思いきや、2020 年に、キタウラジロチチコグサとミナミウラジロチチコグサの 2 種類があると判明。



▲文献資料も少ないため見分けが困難だけど、ミナミウラジロチチコグサかな？



▲北アメリカ原産のチチコグサモドキは、大正時代から昭和にかけて渡来したとされ、戦後に分布を拡大したと言う。



▲北アメリカ原産のタチチチコグサ(別名ホソバノチチコグサモドキ)かな、花序の葉は細い。

2025.6.3 路傍の花～その 12～ 「似た者同士⑩」



藪に咲く小さな花、そして衣服にくっつき「引っ付き虫」と呼ばれる部類の種が、しらみに似ているヤブジラミとオヤブジラミ。ちょっと見ただけでは見分けがつきません。分かりやすいのは、開花の時期。オヤブジラミの方が開花期が2週間ほど早いようです。また、栗野ではオヤブジラミが畦道などに多く見られるのに対して、ヤブジラミは鳥羽川堤に多く見られます。オヤブジラミの方が水分を好むのかもしれませんが。

ヤブジラミの方が、小花を密に付けます。一方、オヤブジラミの花は子房が長め(大きめ)で、実も大きめ。色も濃い目なので、雄とされたようです。今の時期だと、白い花が満開で種も少しずつ実り始めています。

すでにオヤブジラミの種は紫色に熟し、葉は枯れ始めています。花は、来年までお預け。



▲ヤブジラミの方が、蜜を吸いに来る虫が多い ▲種を实らせ始めたヤブジラミも。
気がする…気のせい?(写真はハナアブ、トップ写真はベニシジミ)。



◀鳥羽川の堤にはヤブジラミ…



▲水田の脇にはオヤブジラミ…比較すると花がまばら(5月14日)



▲オヤブジラミの子房はやや長い(5月16日)



▲引っ付き虫…オヤブジラミの実が紫色に変化(5月28日)

2025.6.5 小さな庭の小さな虫たち



▲アゲハチョウはグループでやってきます。

猫の額のような庭にも、小さな小さな、多くの虫たちが集まってきます。ほぼ見られない日や時間帯もあり、気温や天候にも影響されるのでしょうか。草花や木にとって害虫が目立つのは気になりますが、それを餌にしているクモやカマキリの子もいるので、薬剤を使うのもためらわれます。生命の息吹きを感じつつ、今年の梅雨入りはもう間近。



▲アシナガバエの仲間



▲これも、アシナガバエの仲間



▲ハバチの仲間



▲オオアカマルノミハムシ



▲ヨモギハムシのペア



▲セマダラコガネ



▲きれいなラミーカミキリは、ムクゲを枯らすほどの害虫



▲チャバネアオカメムシ



▲刺されると痛い・・・ヨコヅナサシガメは危険。サシガメの仲間



▲アワフキムシの幼虫が作った泡は、他の虫などに食べられないためのバリアー



▲アオバハゴロモムシの幼虫



▲いつの間に?・・・丸々太った体長 5cm を超すブドウスズメの幼虫は、斑入りノブドウの葉をあっという間に食べつくす。



▲がんばれ!! アリグモ…最初はアリかと思いました。



▲がんばれ!! ササグモ

2025.6.9 ササユリ



畜産センターのササユリが見頃を迎えていますが、奈良にお住まいの二人から、ササユリの情報をいただきました。

まずは、Iさんから「奈良県桜井市の大神神社の朔日参りで笹百合園に何本か咲いていました。その大神神社の摂社(本社に付属し、その祭神と縁の深い神を祀った社)の奈良市の率川(いさかわ)神社では、毎年6月7日にゆりまつり※があり、3,000本のササユリが奉納されます。宇陀市の農家に頼んで育ててもAらっているらしい」との情報。

宇陀市にお住まいのAさんからは、「大神神社のササユリは、宇陀市大字菟田野(うたの)大神の住民が毎年神社に届けているそうです」。また、「昔は水田の土手によく咲いていたけれど、イノシシが球根を掘りつくし、なくなってしまった」とのこと。「ササユリが咲く頃が、田植えの時期だった」そうです。

歴史に抱かれた奈良の地ならではの、ササユリにまつわる生のお話が聞けて、ネット社会に感謝です。

※率川神社の「ゆりまつり」：「三枝祭」とも呼ばれ、大宝元年(701)制定の『大宝令』には、すでに国家のお祭りとして定められ、大神神社で行われる鎮花祭(はなしずめのまつり)と共に疫病を鎮めることを祈る由緒あるお祭り。

2025.5.30 ホタルブクロ



栗野では初めて、鳥羽川堤で白い花卉のホタルブクロを数株見つけました。破れていた花袋があったのでよく見ると、中にクモが身を隠しています(アズマキシダグモでしょうか)。獲物を待っているのでしょう。この辺りは、河川改修前は、怖いほどにホタルが乱舞した場所。いつか復活してほしいもの。ホタルブクロとホタルの景観が見られたら、最高ですね。



▲クモが、ホタルを閉じ込め光を遊んだと言われる花袋で獲物を待っている。

2025.5.30 アオサギ



▲アニメ「君たちはどう生きるか」の怪しげなキャラクター・アオサギを彷彿とさせます。

あたかも乱開発の様相を呈している栗野西。狭い道路を挟んで、あっという間に集合住宅や戸建て住宅が棟上げ。

肩身の狭そうに田植えの終わった水田には、タニシやオタマジャクシ、ドジョウがまだ生息しています。アオサギが餌をとるために飛来しました。水田に訪れる最大の鳥です。

最近、営巣にやってきたケリの姿を見かけることがめっきり少なくなりました。飛ぶ姿はカモメのようで、けたたましい鳴き声のあの鳥です。専業農家が減って、耕し、水を張る季節が連休にずれたため、巣が破壊されてしまうせいもあるのかもしれませんが。早春のけだるく薄曇りの天高くから降り注ぐ、ヒバリのさえずりも近年聞くことがありません。

一方のアオサギ。困りもの、との他県の人のお話を聞きました。裏山に数十羽のアオサギの巣があり、朝に飛び立ち、また戻って来るを繰り返し、住民は大変、木々も大量の糞のせいで枯れているそうです。さらに、大きな体で早苗を踏みつけるため、迷惑千万とのこと。

人と自然、人と動物の共存には、人と動物の程度こそ違えど、ともに悩みは尽きないようです。

2025.6.12 団地を1周～その2～



コミノネズミモチ(5月22日に開花しているのを発見)はすっかり花を落とし、テイカカズラ(5月28日に開花)も散り散りに残る程度。一方、サカキ、ムラサキシキブが咲き始めました。ナワシロイチゴが実を付けています。ハリギリと思われる若木が生えています。この辺りでは珍しい。タラの芽と並ぶ山菜の代表格、コシアブラもタラの生えているあたりの山林で見つけました。もう食べるには遅いですが。

9日に梅雨入りした東海地方、いよいよ梅雨も本番です。



▲低木のコミノネズミモチはとっくに散っていました(5月22日撮影)



▲つる性のテイカカズラも、ほとんど散っていました(5月28日撮影)



▲サカキ(6月12日撮影)



▲ヤブムラサキとそっくりのムラサキシキブは、葉の手触りと花のつき方で見分ける。



▲上向きに咲くムラサキシキブ、コムラサキシキブとは樹高や葉のふちのギザギザで見分ける。



▲ハリギリと思われる若木



▲キイチゴの仲間



▲ありました!!山菜の女王と称されるコシアブラ。王様のタラの芽もちゃんとあります。タラの木は鳥が種を運んでくるのでしょうか、庭にも生えてきたものです。

2025.6.18 台風シーズン



公民館講座「災害への備え」を受講してきました。多くの参加者が(女性が多い)、備蓄品や簡易トイレの実習など1時間半ほどの講座を、楽しみながら、熱心に学びました。

特に印象深かったのは、過去の災害を語り継ぐことも重要との講師の指摘です。昭和34年、この地方に甚大な被害を与えた伊勢湾台風の記憶は、参加者の中にも体験者が多く、我も我もと語り合いました。

その日のことは、長良川の堤防沿いに住まいのあった小学生の私の脳裏にも深く刻まれています。名古屋に努めていた父が、昼下がりに帰宅し、南の窓にトタン板を張り終え、また勤務先に戻っていきました。「今度の台風は大きい。なのに新聞やテレビも東京に関係がないことは大きく報道しない」。何につけても、地方のことは後回しの時代だったのでしょうか。父は、仕事の関係上、台風の進路には注意を払っていたおかげで、最低限の備えをすることができました。深夜、母と兄の3人は、神様にお祈りする長い時間を過ごしました。うなりをあげて一呼吸置きながら吹きつける風、ミシミシと音を立て今にも壊れそうな木造2階建て。台風の日に入り、しばし穏やかになりましたが、再度うなりを上げ始めました。ロウソクの灯りを囲み、家屋の一番北のトイレの前の平屋部分でおびえ、風が収まったのはまだ夜が明けぬ時分。ひと眠りしたものの寝不足のまま、長良川の様子を見に行くと、思ったほど水かさはありません。もちろん濁流が太木を押し流してくる様子はすさまじい迫力。水が引いたのは4日ほどたってから(当時は今よりも流下速度が遅かったのです)のこと。びっくりしたのは、砂山に覆われていた河原が、石だらけの景観に変容していたことです。駆けまわり、落とし穴をつくった遊び場は、影も形もなくなっていました。

町内では、尊い命が失われました。4軒隣の平屋家屋が倒壊し、男性が亡くなったことが伝えられてきました。

電気の復旧がいつだったか、記憶はありませんが、給水車が訪れた翌日は、真っ赤に燃えるような夕焼け。水にはあまり困った様子はなかったのも、近所のお宅から手汲みポンプの地下水をもらったかもしれません。

市内の至る所で浸水被害がありましたが、幸いにも私の住む地域では大規模な浸水がなかったおかげで、生活は比較的普段に戻るのは早かったようです。

その数年後、第二室戸台風が、昼前にやってきました。風は、負けず劣らずの強さで、怖さもひとしおでしたが、夜間の台風ほど怖いものではありません。

当時に比べて、海水温は上昇しています。異常気象による超巨大台風の襲来が、あってもおかしくありません。

大切な情報源は、当時と同じようにラジオでしょうか。今では、欠かせないスマホの充電もできるソーラーラジオをホームセンターの特価で安く買いました。気を付けないといけないのは、ネット通販では1万円前後の品も見受けられることです。また、同時に購入したソーラーランタンは、すぐに壊れてしまいました。安価で優れた災害用品の開発・提供が必要です。

食料のローリングストックや停電、断水に供えた備蓄品の購入や定期的なチェックが求められています。

2025.6.20 アジサイの山寺に想う



▲手水鉢に浮かべた花の演出には好感が持てる・・・蛇口が水道栓なのは・・・

我が家から車で20分足らず、お隣の山県市の三光寺にアジサイ見物に行きました。ネットによれば1万株200種の東海随一の紫陽花スポットと言ひ、名前の由来となる伝説のある山寺は、かつては女人禁制だったと言います。

平日のこの日も、アジサイ目当てに多くの人々が訪れていました。

山間部だけに高齢化などにより、人手が足りないのでしょうが、ブラッシュアップすればリピーターも増すことでしょう。この日もテレビ取材が入り、翌日、名古屋テレビで放映されているのをたまたま見かけました。山県市役所でも、大々的にネット配信

(<https://share.google/BAbcxBg9I0rzCHQqT>)していますが、さらに磨きをかけたいところです。

岐阜市や栗野にも多くの隠れた資源が、息づいています。歴史までコンパクトシティ化してはいけません。自分たちの宝に地域住民は関心を寄せる一方、市は市の魅力を戦略的・計画的に講じ、地域と協働してブラッシュアップする責任があります。

道三親子が対峙した鷲山城と岐阜城の構図などは、壮大なランドスケープとなりそうです。私たちの地域の眉山山頂の鎧塚古墳もしかり。琴塚古墳より古く、古墳時代からの悠久の歴史を秘めています。

アジサイに触れ、改めて考える機会をもらいました。地域の宝について地域の共感を得るには、まずは一緒に学び合う仲間づくりから。



▶アジサイの時期に合わせて、本殿ではご本尊の御開帳が行われていました。



▲このところの真夏日にお疲れ気味のアジサイも、水際では色彩豊かに



▲満開を迎えた菩提樹も山県市の天然記念物



▲コイが泳ぐ弁天池



▲はがきの樹とも呼ばれる多羅葉は、山県市の天然記念物に指定されている。栗野の済法寺境内のより太い。



▲ツルアジサイのイワガラミが樹木を伝う。

▶イワガラミの花と萼片



2025.6.28 品格のある町



隣接する住宅が排ガスの影響を受けないよう、店舗の駐車場の多くは、「前向き駐車をお願いします」とのサインボードが掲げています。市内の駐車場では、おおむねトップの写真のように、マナーを守って駐車しています。ところが、よその市に車を走らせると、いつ訪れても9割がた、後ろ向きで駐車してある店舗があります。トップ写真の看板より、大きく、わかりやすいイラストもかかっているのにどうしたことでしょう。読解能力なののでしょうか。そもそも、我が家が同じように隣接することをイメージすれば、実践できる気がするのですが。

地域では、ポイ捨て・不法投棄がとみに目立つようになりました。上流部から流れついたり、通過交通が放り投げて行ったりと。

訪日外国人が「ごみ箱が見当たらないにもかかわらず、日本はごみ一つ落ちていない美しい国」と異口同音に唱えるのは、品性ある都市部か観光地？

品格ある都市・町を目指すことは、どの地域のまちづくりにも共通するテーマ。



▲お隣りの市の大規模スーパーの駐車場のありさま



▲上流部から流れついたごみ。県内で唯一無料だった岐阜市の普通ごみ収集も有料化に向かっている



▲通過交通の多い道路に面した田は、冬になるとポイ捨てごみが目立つように。農家にとっても大迷惑!!

2025.7.2 米不足?



昨夏の8月末、突然、米売り場から米が消えて、間もなく1年が経とうとしています【トップ写真は昨年8月20日撮影】。当時は、「間もなく新米が出回るので心配ありません」・・・その後の迷走はご存じの通り。

米価が高い、安いはともかくも、売り時を見定めるかの如く、市場から米は消えました。

水戸黄門の時代のことと思いや、何と買い占め、売り控えが現実には？

江戸時代で言えば、お助け米が出回りだした途端、銘柄米が山積み

に。消費者運動も盛んではなくなった近年、もとより打ち壊し騒ぎにも発展しない非行動社会とでも言いましょうか、的確な情報もマスコミも報道できないまま、国の施策の妥当性も判断しづらい感があります。

米の適正価格が生産者に反映されるよう、さらに自給率向上、里地里山と国土の環境保全を国策に求めたいもの。

折から、トランプ大統領が、「米不足なのにアメリカ米を輸入しない」とご立腹。国民にも米(こめ)関連の政策の全容が届かない状態で、他国に理解させることができるのか、本当に不安。



▲銘柄米は5kg 当たり 4,000 円台後半に【7.3.22】



▲備蓄米放出決定後も値段は変わらず【4月3日】



▲ますます高騰【6月5日】



▲価格高騰ばかりか、米が棚から再び消え始める【6月6日】



▲突然、銘柄米が山積み【6月15日】



▲市内でも備蓄米入荷予定の張札がお目見え【6月16日】



▲進む農地の宅地化【7.6.28】



▲地域に伝えられていた雨乞い踊り(岩野田郷土誌より)



▲近畿地方では、6月27日、統計史上最速の梅雨明け宣言(6月9日梅雨入り)。米にも影響が?【7.6.28】

2025.7.26 宝の持ち腐れ



▲眉山の航空写真と鎧塚古墳(岐阜市史資料編より引用)

地域にかけがえのない資源があっても、地域が認識していなければ、意味をなしません。近くにあり過ぎて、かえって気付かないものなのかもしれませんが…。

毎日見上げる眉山は、徳島市の観光地の眉山と同じ名前です。万葉集に歌われたことが、徳島の眉山の名の由来と聞きます。

岐阜市のこの地の眉山は、江戸時代にこの地を訪れた頼山陽の命名によるもの。「眉を引いたように優美な山容」ことから名付けたもので、その秀麗さは、徳島市の眉山に決して劣るものではありません。

特筆すべきが標高 231m の山頂にある前方後円墳。鎧が出土したことから名付けられたこの古墳は、墳長 82m、市内で最も古い年代に築かれました。麓との標高差は約 207m。古墳時代中期の築造で、この地域一帯を治めた牟義都(むげつ)の墓とされます。

では、全国的この高さにあるこの規模の古墳としては、どの程度のランキングに位置するのでしょうか。市教育委員会に問い合わせしてみました。残念ながら、データは把握していないとのことでした。どうやら、全国古墳データ一覧から、抽出するよりほかないようです。全国 6,799 墳から、墳長 82m 以上の古墳を抽出し、標高差、立地状況を確認しました(大変でした・・・)。その結果、鎧塚古墳より標高差がある場所に造られた古墳は、福井県の石舟山古墳(標高差約 210.5m・墳長 83m)、二本松山古墳(標高差約 227.6m・墳長 83m)、若草山の鶯塚古墳(標高差 227m・墳長 322m)の 3 つのみ。若草山の古墳は、規模は大きいようですが陰しい山頂ではありません。いずれも国指定史跡となっています。

このように、5本の指に入るのに、鎧塚古墳は、雑木に覆われて未整備のまま荒れ放題の有様です。どうしてこんなことになっているのでしょうか。納得がいきません。まずは、古墳としての価値を整理し、地域と市で情報を共有することから始めなくてはならないようです。

古墳時代と言え、栗野も含めたこの地域は、現存する戸籍で最も古いものの一つ「三井田里戸籍」(みいだりこせき)が残されています。

もっと地域の歴史に関心を持つ必要があるようです。道三、織田信長よりはるか古い時期に、この地は、大きな力を蓄えていたようです。一步步、古代のロマンの世界へ、みんなでタイムスリップしてみませんか。

2025.8.8 猛暑



8月5日、国内観測史上最高気温 41.8 度が、群馬県伊勢崎市で観測されました。ちなみにこの日の岐阜市の気温は、37.6 度。気温以上に体感温度は高く感じられます。栗野の夏まつりが開催された3日の最高気温は、2日続きの 38.7 度。クーラーをつけていても、熱中症になりそうでした。

昨日、8月7日は立秋。7時ごろから午前中は久方ぶりの雨。そのせいか、涼しさを感じる今朝、虫の初鳴きが聞こえました。

このところ、ツバメが群れています。巣立った家族と仲間でしょうね。昨日は、頭の上をカモが、騒々しく群れ飛んでいました。4日は、鳥羽川堤をアカトンボが群れていました。この暑さにもかかわらず、生き物たちは夏を乗り切っているように見えます。

加熱する地球温暖化や海洋汚染などの不敬な行為が、多くの生物の生育環境を脅かしています。台風など自然の猛威に対して、まるで無力な人間のせいで。



▲気温の高い昨今、海を渡って帰っていくのはいつごろでしょう？

2025.8.15 ジャンケン ケンセツ ダイトウア



戦後 80 年。私は戦後まもなく空襲を免れた金華地区の町家で生まれました。3 歳で引っ越した隣町は空襲で焼け野原になったはずなのに、すっかり復興し、今日の街並みがすでに形成されていました(ただ、小学生の頃、同級生のアパートを訪ねた時、外部からは分からなかったけれど、黒焦げの材で構成された空間を目の当たりにし愕然とした記憶があります)。

父は南方に出征していましたが、ほとんど戦争体験を語ることはありませんでした。近眼でしたが、せっかくの飛行機も、修理を行う人がいないと聞いて、徴兵ではなく志願したようです。9 人兄弟の末っ子で、随分可愛がっていた母親は悲嘆にくれたそうです。実際に赴くと、飛べるような飛行機は全くなかったと言います。

機銃照射が爆弾以上に怖かったこと、目が合ったパイロットが笑っていたこと、今にも墜落しそうな飛行機に乗り込み南の島から帰国できたこと、飛行機嫌い、バナナ嫌いになったこと、を話したことがあります。母の死に目に会うことはできなかったと兄弟筋から聞きました。母の実家で、ほどなくマラリヤにかかりました。キニーネは本当によく効いた、と母が何度も語っていました。戦地にとどまっていたら、病死していたに違いありません。

母の実家の町家は、強制的に間引かれた(建物疎開)ものの、不思議と暮らしの支障を語ったことは一度もありません。ラジオから流れる玉音放送に、意味は分からないものの、なぜか涙があふれたと言います。

全てがこんな内容の両親の話は、なんだか霞みの向こうにあるようです。戦地に赴いた人は思い出したくないのかもしれませんが。銃後の人々も空襲にあったとはいえ、沖縄や広島、長崎の悲惨さに比べたら、暮らしそのものに戦時下の実感が少ない地域も少なくなかったのかもしれませんが。

30 年代初頭までは、忌まわしい記憶には、あえて触れようとせず、一步を踏み出そうとしていたのでしょう。暮らしに追われ、そんな余裕もなかったことも確かです。一方、子どもたちは意味も解さず、ジャンケン建設大東亜と叫んでグーチョキパーを出し合っていました。父と浜名湖の遊覧船に乗った時、出航時に音楽が高らかに鳴り響きました。初めて耳にした軍艦マーチに心が躍りました。本屋には子ども向けの太平洋戦史シリーズ「戦火もゆる太平洋」(昭和 37 年発行)など戦記物が並び、日本軍の戦果を読みふけりました。今も書棚に残っていますが、誇りを持って戦ったことが記述の中心で、アメリカが資料提供していることに驚きです。子供向けの漫画にも戦記物は少なくありませんでした。

とは言え、二度と戦争を起こしてはならない、口には出さずとも人々は共通の思いを深くする一方で、戦時下のプロパガンダの名残が子どもの遊びに見られ、勝利することへの高揚感は、本能的というより、ごく自然に身にまとわされるのだと。

平成初頭、南京大虐殺に対し、実際に現地に駐留した全国の人々が声を上げようとしたとき、今さら言っても仕方がない、と断ったと言う人がいました。結局は、なぜか大きなうねりにはならなかったようです。

平成の半ば、支給された黒パンは、腹が膨らむから、食べ過ぎが命取りになったとシベリア抑留経験者から聞きました。

太平洋戦争末期、広島に落とされた原爆部品を運んだ米巡洋艦インディアナポリスを撃沈した伊58潜水艦の乗組員ともお付き合いしましたが、知ったのは遠縁になってから新聞に掲載されてからのことでした。

確かに、戦時中の語り部の話を聞いた経験はありましたが、私の生活圏内で戦争を語った人は、ほとんど記憶にありません。

今年、NHKが今年行ったアンケートで、戦争を体験していない世代に、戦争の歴史がどの程度継承されていると思うか聞いたところ、「十分に継承されている」が1%、「ある程度継承されている」が28%、「あまり継承されていない」が64%、▽「まったく継承されていない」が6%との結果が出ました。

先ごろの参議院選挙も含め、節操というものが感じられない、近年の傍若無人な主義主張が支持拡大されるのを見るたびに、日本も対立分断の時代なのだろうか、これが民主主義なのだろうか、間違っているのではないか・・・疑問がわくのは私だけではないでしょう。

昨年、世界では、36か国で紛争が起き、戦闘関連死は129,000人に上ると言います。我が国を取り巻く地域でも、ウクライナ侵略戦争を始めた国、海洋進出に余念のない国、核武装を進める国、自国第1主義を抱える同盟国など、地域の平和を損ないかねない状況が、悪化の一途をたどっています。

戦後80年を機に、平和の尊さを共有・実現するためには、体験者の多くの証言や歴史をねじ曲げることなく、様々な角度から蓄積・検証し、次代へと伝えることが大切です。それには、政治、プロパガンダ、戦地、暮らし、教育など、分野別に体験談を採録・記述し、かつそれぞれの検証結果・コメントを付し、公開することが第1段階。並行して、平和教育の在り方、明治以降の歴史、そして国際情勢、安全保障に至るまでの考え方を整理することができる独立・中立の平和研究機構を設立すること。まさに戦争の当事者であり、原爆被害を受けた我が国にこそ、必要な国策ではないでしょうか。

子どもたち、孫たちが、そして世界が平和に暮らすことのできる地球を実現するために、国民がこぞって、共通の目標として掲げるべきテーマであるはずです。

2025.8.21 米不足?～その 2～



米の生産量は足りているとしていた農水省の統計の誤りが表に出たのは、8月初旬のこと。食料自給率という、重要な政策課題に対して、複数の善意の読み違いだたとしても、ミッションを達成すべき農水省自身が自らの首を絞めたようなもの。ここに至って、安全保障を棚上げに減反政策を続けた国も、ようやく生産量拡大へ舵を切ると方針転換。

とは言え、相も変わらず自給率 100%が精一杯の目標?!

8月14日、県内のトップを切って、海津市で新米の出荷が始まりました。猛暑や水不足で懸念されていた品質も、最高ランクの1等米だそうです。気になる値段は?



▲穂が実り始めた田も見られる栗野の早場米の収穫は、いつ頃になるのでしょうか?

これ以降の日記は、現在編集集中です。